

- 5 安心に関する住意識の調査研究

A Study on Residents' Attitude on Safety

(研究期間 平成 17 年度)

住宅・都市研究グループ
Dept. of Housing and Urban Planning

小島隆矢
Takaya Kojima

樋野公宏
Kimihiro Hino

There is little research on the residents' attitude on safety in buildings or neighborhoods. In this study, a questionnaire about disaster prevention and crime prevention was made to grasp the present condition of it and the result was analyzed using the technique of structural equation model. The main conclusion is that it is not dissatisfaction nor fear but attraction of buildings and neighborhoods and attachment to them that enhance residents' interest and result in action to improve them.

【研究目的及び経過】

「安全で安心な建築・都市」が広く国民に求められていることは論を待たない。しかし、「安全安心」を「安全」と「安心」に分けて考えてみると、物理的な「安全」に比べ、主観的な「安心」については、防災・防犯・日常生活事故のいずれの分野にも共通する問題でありながら、どの分野においても知見が乏しいのが現状である。

本研究課題では、安全安心の主観的側面である「安心」に関する基礎的知見を得ることを目的として、住居と地域の防災・防犯に関する意識調査の分析を実施した。

【研究内容】

若林・小島¹⁾では、1996年に実施した防災に関する住民意識調査に対する統計的因果分析の結果から、望ましい防災意識や対策行動注1を導くためには、危機感を高めることは逆効果であり、地域への愛着を高めることが効果的であると報告した。そこで、約10年が経過した現代においても、また、防災だけでなく防犯意識に関しても、同様の構造が得られるかを検証するため、東京都内居住者1310名を対象に、次のような調査を行った。

主要な設問（分析に用いた項目のみ示す）

- ・「地域の防災」「地域の防犯」「自宅の防災」「自宅の防犯」に対する「不安度」「関心度」を評価する設問（大いにある～全くない：4段階評価）
- ・「地域」「自宅」について、「不満度」「魅力度」（大いにある～全くない：4段階評価）、その他様々な観点の評価（5段階評価）
- ・地域/住居の防災/防犯に関する意見・意向・行動を問う様々な設問（意見・意向は5段階、行動は「はい・いいえ・（どちらともいえない）」）

仮説設定

- ・不満は不安を高め、魅力は関心を高める。
- ・不安は望ましい意見・意向・行動に結びつかない。

・関心は望ましい意見・意向・行動に結びつく。

分析方法

上記因果仮説を構造方程式モデリング（SEM）により検証する。本来、SEMは量的変数に対して適用する手法なので、「はい・いいえ」で回答する行動の設問に

表1 行動に関する設問の合成変数化

合成変数	もとの項目(実際のワーディングのまま)	自宅	地域	防災	防犯
参加域 率 防 災 防 犯 活 動	防災訓練や防災フェアなどの行事に参加したことがある				
	防災に関する座談会、講演会などへ参加したことがある				
	夜間パトロールなど、地域の防災防犯活動に参加したことがある				
家 族 で 話 し 合 う	地震や台風などの災害への備えについて、家族などと話し合ったことがある				
	ご自宅の防犯対策について、家族などと話し合ったことがある				
	大地震のときの「家族などとの連絡方法」を決めている				
鍵 対 策	在宅時にも、必ず施錠している				
	鍵に対策をしている(ピッキングしにくい構造の鍵にする、鍵を増やす、など)				
	わずかの時間でも、家を空けるときには必ず戸締まりをしている				
震 動 対 策	食器棚などの家具を固定している				
	地震時に倒れないよう、テレビなどの置き方を工夫している				
	非常時のための飲料水を確保している				
物 資 の 準 備	缶詰などの非常食を用意している				
	カセットコンロや固形燃料などの燃料を用意している				
	懐中電灯やローソクを用意している				
	携帯用ラジオを用意している				
	救急箱を用意している				
	非常用持ち出し袋を用意している				
不 在 時 対 策	帰宅が遅くなる場合は、洗濯物を室内に干して外出するようにしている				
	長期、家を不在にするときには、隣近所に声をかけている				
	長期、家を不在にするときには、新聞などの配達をとめている				
	夜間の外出時には、明かり(室内灯)をつけたままにしている				

については、数量化 類の結果を参考に表 1 のように分類し、単純加算得点（「はい」と答えた設問の数）による合成変数化を行っている。

さらに、グラフィカルモデリング、探索的因子分析などの探索的因果分析により、因果モデルの骨格について事前に検討した上で、SEM に持ち込むという手順をとった。

【研究結果】

得られた因果モデルを図 1 に示す。各種適合度の指標は、いずれも良好な値である。

片側矢線には因果的影響の大きさを表す標準化パス係数、薄い色の両側矢線には相関係数を付与した。また、片側矢線の太さは標準化パス係数に比例させてあり、絶対値 0.1 未満の、ほとんど無視しうる場合を点線で表示した。

図中、上半分に地域、下半分に住居に関する項目が配置され、ほぼ上下対称の構造となっている。また、防災と防犯の違いについても位相的に区別がつかないモデルとなっている。つまり、地域/住居、防災/防犯の違いによらず、基本的な因果関係は共有されているということである。その内容は次の通り。

- ・地域/自宅とも、「不満度」は「不安度」に、「魅力度」は「関心度」につながる。
- ・「関心度」は「地域活動参加」「家庭での防犯防災対策実行度」という望ましい意向・行動につながる。

- ・「不安度」から「関心度」への影響はほとんどない（絶対値 0.1 未満の点線パス）。
- ・「不安度」から望ましい意向・行動への影響はほとんどない（「地域活動参加」への点線パス）、あるいは逆効果（「家庭での対策実行度」への負のパス）である。
- ・「地域の防災防犯不安度」と「自宅の防災防犯不安度」、「地域の防災防犯関心度」と「自宅の防災防犯関心度」は相互に影響を及ぼし合う。

これらの結果は、事前に設定した仮説を検証・強化する。すなわち、地域/住居、防災/防犯といった違いによらず、不満や不安ではなく、魅力や愛着を高めることが関心を高め、具体的な対策行動につながるということが示唆された。

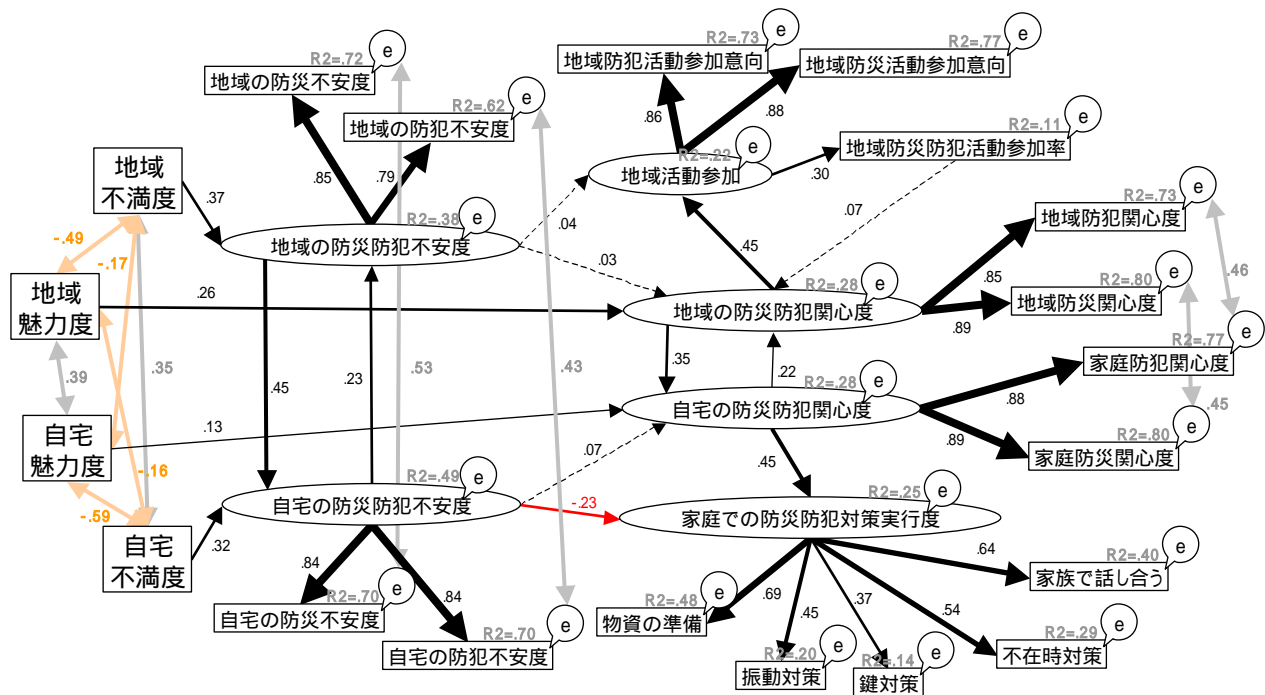
「危機感」と「関心度」は混同されがちであり、啓発事業や市民活動の中で不満・不安を煽るようなコミュニケーションが行われる場合も少なくない。本研究課題の結論は、これらの活動の方向性に対する警鐘となる。

【参考文献】

- 1) 若林・小島：住民意識調査による防災意識の構造に関する研究，日本行動計量学会第 29 会大会発表論文抄録集，p.172-175, 2001.9

【注釈】

注 1：本稿の中では、自主的・積極的な対策行動に結びつく意識・行動を「望ましい」と表現している。



適合度：N=1013, $\chi^2=453.2$ (df=149), p=0.000, 2/df=3.042, GFI=0.958, AGFI=0.941, SRMR=0.055, RMSEA=0.045, CFI=0.963

図 1 地域/住居の防災/防犯意識に関する因果モデル